International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Wednesday 11 May 2011 (morning)
Mercredi 11 mai 2011 (matin)
Miércoles 11 de mayo de 2011 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

© International Baccalaureate Organization 2011

https://xtremepape.rs/

次の1の詩と2の文章のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

夕日の中の樹

いつか私に正午は過ぎて、
今　太陽はつづく世代の頭上にある。
地に落ちる私の影がすでに長い。
なんと南中の時の短いことか。

病んだ枝も　虫ばまれた葉も
茂る途上の必然に過ぎない。
秘められた生の衝動にしたがう時
運命の樹容はついに成るのだ。

好ましい歌　悪しきしらべが
それぞれの風に私から響いた。
その不協和をふくむ全体の調和が
善かれ悪しかれ私本来の叫びだった。

多くの葉が私に燃え、
多くの焔が私をうずめる
こうして日も傾いてなお暮れなずむ秋の野に
孤独の絢爛を私は遠く織っている

（尾崎喜八『花咲ける孤独』一九五五、現代仮名遣いに変更）

（注）
南中　天体が子午線を通過する現象。天体高度はこの時最高となる。太陽の南中時刻が正午。
樹容　樹木のかたち。
絢爛　きらびやかに輝いて美しいこと。

https://xtremepape.rs/

- 夕日の中の樹木はどのように描かれ、詩人はそれをどのような思いで見つめていますか。

- 詩人の、本来の叫びとは、どのようなことをさしていると思いますか。

- この詩の中の樹木と詩人の孤独はどのように結びついていますか。

- この詩の表現上の工夫を指摘し、それがどのような効果をあげているか、考えるところを述べなさい。

https://xtremepape.rs/

私は郵便を出したり煙草を買ったりしたその足で、ときどき近くのスーパーマーケットをのぞく。そして、別に買う気もない商品をあれこれ面白半分に見て歩く。手にとって眺めたりもする。そういうことが私は昔は嫌いだったはずなのだが。ある日、そんなふうに店内をぶらついていて、私は棚の上になつかしい品物を見つけた。少なくとも、ここ何年か忘れていたものに久しぶりにお目にかかったのである。（というのも、妻はそれをあまり買いたがらなかったからである。）

それは袋入りの味噌で、八丁味噌と言うものであった。赤いというよりは真っ黒なと言いたいような色合いの、練り固めた濃厚な味噌だ。

どうしてそれがなつかしいかと言うと、私は赤ん坊の頃からその味噌で育ったからである。早くからその味に慣らされたので、味噌といえばああいう色をしたものと思っていたくらいであった。

岡崎藩の武士の家に生れて、――父の少年時代にもう生家は零落していたが――岡崎の町で大きくなった私の父は、同じ岡崎産のその味噌でなくては承知しなかったのである。（中略）大阪育ちの母は、この味噌を内心は敬遠したがっていたにちがいない。（私の妻同様に）。ところが、父はこれが好きで好きで、晩酌にそのまま舐めるぐらいだったのである。……そんなことを、私はまた思い出した。そして、その味噌を一袋買って帰った。

何も味噌のことばかりではない。この頃私は年とともに、死んだ父親のことを考えるようになっている。それも以前みたいに、ただ息子として亡父の生前の姿を思い出すというだけではない。むしろ現在の私自身の生き方と引き較べて、父の完結した一生を思いやるようになってきたのである。早い話が、私は「おやじの一生というのもそれほど悪くはなかったな」と思うようになったのだ。

戦争が終って海軍大佐で復員した時、父は五十三かそこらだった。当時としても停年には間があったが、父は出来るものならさっさと隠居してしまいたかったにちがいない。世の中がひっくり返ってしまったのだから、仕方がない。陸に上がったネイビーなんていうものは無用の長物である。公職からは追放されるし、働き口はなし、売り食いぐらいしか生計の途はない。むしろこれさいわいである。それで父は、しばらくは世間と絶縁して、ヤミのパイプ煙草を吹かしたり、古い横文字の本を読んだり、趣味の書きものをしたりして、結構悠々自適に日を送っていた。

だが、もともと貯えがあるわけでもなし、じきに苦しくなった。父がまるで生活のことを考えないので、母は陰でずいぶん苦労をした。文字通り泣いていたと思う。こないだまで奥様風を吹かして、女中を追い回したり御用聞きを叱りつけたりしていた母が、質屋がよいもすれば、内職もするまでになった。恥をしのんで下働きみたいな仕事に出たことさえあった。今でこそ主婦がパートタイマーでどこへ行こうが、こそこそと隠れることはな

https://xtremepaper.rs/

い。ところが、当時はまだそうではなかった。明治生れの母には、労働の辛さなんかより世間の目のほうがずっとこたえたことだろう。ところが、母がやつれた顔をして金策に走り回っていても、父は相変らず悠然として家にいたものだ。

「なんとかしてくださらないと……」

そう母が訴えても、知らん顔である。無いものは無いというのが父の返答である。そうして、母があまりうるさく言おうものなら、父はしまいには怒り出した。父の科白はふるっていた。

「おれに泥棒でもして来いって言うのか！」

しょうのないおやじだ、と私も子供ながらに呆れる思いがしていた。男が職がなく、一銭の収入もなければ、出来るのはたぶん乞食か泥棒ぐらいのものだ。だのに父は無精なのか不器用なのか、その泥棒も出来ぬという。

実際、母は父みたいに経済観念の欠如した人間には会ったことがないと言っていた。自分の所帯が火の車なのに、友人の危険な借金の保証人を引き受けようとしたり、いかがわしい人種の口車に乗せられて詐欺同様の目に会ったりもしていたのだから、なおさらだ。その尻ぬぐいは、いつも母の役目だった。

この私なら、そんなに家人にせっつかれれば、追い立てられるような気持でいやいやながら金策に出かけるかもしれない。けちな収入にでもありつくためには、誰彼に心にもない言葉を並べて頭を下げるかもしれない。泥棒とまでは行かずとも、さもしい根性を起してなにか破廉恥な手段にすがるかもしれない。そこまで切羽詰れば、しないという保証はない。第一、その状態に至るまでに、自分から先に音を上げるにちがいないのだ。あれを食いたいだの、これを買いたいだの。

しかし、父にはそういうことはなかった。死ぬまで、なかった。父は貧乏が平気だったのである。妻や子供らはそれによってまことに迷惑を蒙ったのだが、父としては、女子供などは問題ではなかったのだろう。

これこそ当節のマイホームの反対であった。すなわち、男は家庭があろうがなかろうが、己の一生に筋を通さなくてはならぬ。没落すべき時には断乎として没落しなくてはならぬ。一直線に、単純に、明快に。――そう父は考えていたのであろう。息子の私が、父の一生を、いまごろになって「悪くもなかったな」と考えるのは、もちろん自分にはそんな生き方は出来そうもないからである。そして、むしろこう言いたくなる。――あれはあれでよかった。これを限りに亡ぶべき種族の一人として、おやじは最後の意地を張り通したのだろうから。

（阿部昭『単純な生活』一九八二）

https://xtremepape.rs/

（注）
岡崎　愛知県中部にある市。徳川家発祥（はっしょう）の地で、江戸時代は本多氏五万石の城下町。
復員　兵士が召集（しょうしゅう）を解かれて帰郷すること。ネイビー、海軍軍人。

－ この抜粋文の中で、筆者の父に対する思いはどのように変化していきますか。

－ 父とその周囲の人々との関係を、筆者はどのように描いていますか。

－ 筆者が父親を描くときの文章やことばの使い方にはどのような特色がありますか。

https://xtremepape.rs/